

現代の図書館目録とカタログの教育について

Trends of the Library Catalog and  
Training of Catalogers

堀内 郁子

*Ikuko Horiuchi*

*Résumé*

In the nineteenth century librarians and catalogers were almost synonymous, and librarian's most important work was to catalog and classify books. Gradually, however, in librarianship other elements have developed such as book selection, reference service and library administration, and cataloging began to occupy smaller area in the whole range of librarianship. By the middle of this century some became to consider catalogers as "grubblers in detail, duffers in trifles, dull, obstinate people." But in reality, the responsibility imposed on them to organize library materials and make them available for the user has become more important and more complex than before, because of the larger quantities of materials to be handled, the greater variety in library materials, increased demands for information and materials, and the increase of demands on speed to process materials. Thus training of catalogers also has become very complicated. This paper tries to examine the trends of library catalogs and cataloging in relation to training of catalogers.



About a century ago most library catalogs were in book form. But since introduction of the card catalog, only the card catalog has been regarded as the library catalog. Recently the printed book catalog begins to gain popularity again as a means of curtailing the size of the catalog, and for the convenience of duplication and movility.

In addition to the printed book form, various other forms are made possible for the library catalog because of the progress of science and technology. Some of them are punched cards, edge-notched cards, roll microfilm, microtext sheets or cards, magnetic tape or wire or drums, etc.

In an age of speed, the periodical form of publication gains more popularity than the book form, and the traditional card catalog has shortcomings to make the periodical literature available for the user. So the index and abstract services must be utilized to supplement the library catalog.

The movement of centralized and cooperative technical processing influences cataloging. In the U. S. there are many successful instances and they are serving to standardize the catalogs and cataloging procedures, to raise the standard of the quality of the catalog, to reduce the cost of cataloging and to mitigate the suffering of libraries from shortage of catalogers. In Japan this movement has not been very successful yet and the development in that direction is expected.

堀内郁子：慶応義塾大学文学部図書館学科。Ikuko Horiuchi, Librarian and Lecturer, Japan Library School, Keio University.

To train catalogers above-mentioned trends should be taken into consideration, and the contents of the instruction should not be same as those covered by Mann and Akers in their textbooks which were written many years ago. More attention should be given to history and theory of cataloging and other fundamental knowledge in the field to give students the ability to adapt themselves to the local situation. Students should be introduced to all types of bibliographic control systems, not just the dictionary card catalog, and should also be instructed in the theory of indexing and abstracting. Handling of periodicals and materials other than monographs should be put more emphasis than before. Students have to know how to operate a technical processing department with economic viewpoint. To clear the cataloger's ill fame, it is worth remembering for them to develop "the creative scepticism" as Dunkin advised us some years ago.

- I. は し が き
- II. 図書館目録の形態
- III. 図書館目録と索引, 抄録について
- IV. 資料整理における協力, 中央化の問題
- V. カタローガーの真の機能

### I. は し が き

図書館というものが社会的な存在として価値があり、有意義なものである限り、その実体ともいべき資料を役立つように組織する整理業務も大切な仕事であることを失わない。過去においては日本でも外国でも図書館の仕事即ち目録・分類であると考えられた時代があった。米国の図書館学教育の元祖ともいべき Melvil Dewey がはじめて作った図書館学校は "School of Library Economy for Training Librarians and Catalogers" という名称で発足し、カタログラーを養成することに重点がおかれた。しかし時代の変遷とともに図書館学校教育のカリキュラムも変り、レファレンス、図書選択、図書館管理というような科目が進出し、目録・分類の科目とこれら3科目が図書館学教育の4本の柱をなした。更に世の中が進んで図書館が社会の進歩と歩調をあわせようとする努力から色々新しい要素が加えられて、相対的には目録・分類の科目の占める比率は非常に小さくなった。目録・分類の仕事がそれだけ重要性を失ったということではないのに、軽んじられ、うとんじられる傾向があることに問題がある。

一体カタログラーとはどんな人種であろうか。世間一般の人々の目に映ずる姿はどんなものであろうか。また図書館界において同僚のカタログラーに対する印象はどんなものであろうか。まわりに本をうす高く積み上げて、うす暗い所で本の標題をカードに書き写している、陰気で退屈な仕事をしている人々であり、ほかでは働け

ない病弱者や老人で間に合うような仕事をしているというのが一般通念であるようだ。図書館が日本よりも発達して、社会になくはならぬ機関として支持されているアメリカの例をとって見ても、Pierce Butler は次のように述べている。

"誰もカタログラーをすかない。カタログラーは図書館界における最下級民でアンタッチャブルである。誰もが彼等を忌み嫌うかまたは隣んでいるようである。同僚達は彼等を精神病か正常以下の人間であると考え、重箱の隅をつつき、因襲にしがみつきの規則を盲目的に墨守し、退屈で、頑固で、想像力の乏しい、ユーモアのない人であると思っている"<sup>1)</sup> という調子で続く。また Jesse H. Shera によれば、"目録作業の著しい特長は、目録は誰からも何らの情熱も示されていないということである。学者は、図書館のカタログは自分達の仕事には一向役に立たぬと非難し、一般読者は、カタログはややくしくてめんどろで、とても使いこなすことはできない、とこぼすし、図書館管理者は目録作業がたいへん高価につく、費用がかさむということを苦にしている"<sup>2)</sup> という。このように芳しからざるイメージで思いうかべられるカタログラーの仕事は、実際にはまことにむずかしく、該博な知識を有し、緻密で几帳面で、判断力と決断力に富んだ人でなければできない。しかも時代の進歩とともにそのむずかしさは増すばかりである。受け入れられて来る資料の量の増大——15年ないし20年で蔵書数は2倍にふえるといわれている——、資料の内容、外形の多様性、専門的な、特殊な、または細分化された新知識領域の増加、非常に敏速な情報提供を要求されること——科学技術関係の特許にかかわりのある情報などは一刻を争って求められる等をあげれば、近代的な図書館の資料組織の仕事が多面的な困難に直面していることは容易に理解されよう。このような困難に立ち向って資料組織の仕事を担当するカタログラーを養成する仕事も亦当然きわ

めてむずかしい。社会的に認められていない仕事であるだけに、優秀な人材を惹きつけることは困難で、その教育はきわめて魅力的であると共に、勇気を鼓舞する性質のものでなければならない。

現在図書館の目録といえば、図書の著者、書名、件名、などを書込んだカードを配列したカード目録を指すのが普通であり、このカード目録を作る仕事を中心とした一連の作業を教えることが、現在までの目録分類の教授内容であった。そういう授業においてもっとも重要な教科書として米国、英国および日本で広く使われて来たものに Margaret Mann の *Introduction to cataloging and the classification of books* と Susan Akers の *Simple library cataloging* がある。殊に前者は 1930 年初版が発行されて以来、最も標準的な教科書として、また現場のカタローガーにとっては常に座右において問題解決の際に助けを求めるとき伴侶となり続けて現在に至った。しかし近頃のように科学技術の進歩がめざましく、社会事情がめまぐるしく変転する世の中で、図書館の資料組織だけ十年一日の如く同じやり方を続けていれば、色々不都合を生じて来るのは当然で、Mann や Akers の本がきわめてわかりやすく懇切に書かれたよい教科書であるにもかかわらず、も早時代おくれで十分役に立たなくなったといわれるのも当然のなりゆきである。以下に、現代の図書館目録の傾向、問題点などを検討しながら、Mann や Akers が古いとすれば、どのように古いのか、これからのカタローガー教育ではどのような点が強調されねばならないかを考察してみたい。

## II. 図書館目録の形態

現在図書館の目録といえばカード目録を指す程、目録の形態としてはカード目録が風靡しているが、最近ではある種の図書館にとっては、カード目録は不便な道具となりつつあり、再検討を加えられるようになった。例えば、ハーバード大学図書館の 1955-56 年度の年報によれば、

この国の大研究図書館にとっては、カード目録の発展は危機に達した。学者に奉仕するためのこれらの目録は、巨大な、複雑なジャングルとなった。これらの目録を維持するには巨額の費用を必要とし、目録が大部になる程、ユニット・コストも増大し、それらを収容する場所も非常に不足して来た。いかに目録作業に巨大な費用と努力をつぎこんでも、目

録を使う人々も、作る人々も益々不満をつのらせるばかりである。……何らかの新しい基盤に向って果敢に取組む必要にせまられている。<sup>3)</sup>

とある。また Fremont Rider が 1938 年現在でエール大学図書館の資料および目録の増加ぶりについて述べたところによれば、同図書館では 18 世紀の半ば頃には約 1,000 冊の図書を持っていた。米国の大学図書館では 16 年毎に蔵書が増加するという統計が出ているが、それによると 1938 年には 2,600,000 冊所有する筈であるが、実際には 2,748,000 冊あった。1849 年には、その蔵書が占める書棚の長さが約 1 $\frac{1}{4}$  マイルで、目録カードは 160 引出しであった。1938 年における 2,748,000 冊の資料は約 80 マイルの書棚を占領し、目録カードは約 1 万引出しであった。それから更に 1 世紀さきの状態を、この過去の増加の割合で計算すると——それは実際よりははるかにうちわの見積りになるにちがいないが——蔵書数は約 200,000,000 冊、書棚は 6,000 マイル余り、カードの引出しは 75 万引出しとなる。この引出しの占める面積は 8 エーカー (約 9,600 坪) 以上で、年間 35,000,000 冊の割で増加する資料の目録作りに要するカタローガーの数は 6,000 人となるという。<sup>4)</sup> このような数字を見れば、大図書館の目録が現状のままで進んでゆくことの不可能なことが容易に理解されよう。量の増加に比例して質的にも複雑さを増し、尋ねる資料が容易に見出せず、カードのジャングルだといわれるのも想像にかたくない。

カードのジャングルで思い出されるのは、最近論争されている国立国会図書館のローマ字ヘボン化の問題で、ジャングルの例は遠く外国に求めるまでもなく、手近かによい見本がある。同図書館の職員組合がこの問題に関して作ったパンフレットによると、和漢書の閲覧目録は 15 種類あり、新聞雑誌については閲覧目録 7 種、事務用目録 31 種あり、更に洋書目録も何種類もあり、極めて複雑な目録体系になっているという。<sup>5)</sup> その一つ一つの目録体系の中で標目や表記法が一定せず混乱しているのであるから、一つのジャングルをさまよい歩いただけではたりず、いくつものジャングルをあてもなくたずねまわらなければならないという、閲覧者にとっては絶望的な状態になっている。そこへまた、ローマ字切り替えという新しい混乱を持ち込もうというのであるから、論争の起るのも無理はない。ローマ字問題をきっかけとして、同図書館の目録および目録作業の内蔵している諸矛盾が明るみに出た観がある。目録作業の目標をはっきり

せず、根本方針が確立していないようにみえる。内外の注目を集めたこの際、姑息な手段で問題をうやむやにすることなく、閲覧者や職員の切実な要求に応え、使いやすい目録を作るために、当局の民主的な英断が望まれる。

さて、前述のように蔵書が大きくなると目録も尨大になり、置き場所に困るようになることが、カード目録の一つの短所であるが、もう一つの著しい短所は、持ちはこびがでず、複製を作ることが困難なので一か所にしか置けないことである。この二つの欠点を補うことのできる目録の形態は冊子体の印刷目録である。冊子体にすれば量的に著しく縮少することができると同時に、何部でもセットを作ることができ、世界のどこへでも必要な場所に備え付けて利用することができる。更に冊子体目録は検索しやすい。カード目録では一度に1枚のカードを見るだけであるが、冊子体であれば開いたページに記載されたいくつかの記入を一度に見られる。特定の著者の作品をまとめて見られるし、同一の図書の異った版をくらべて見ることなどが、カード目録よりも容易である。

また、冊子体目録は図書館間の相互貸借や、複写の依頼等にも便利であるし、近隣の図書館で互いに資料を重複しないように購入するということに図書館間の協力上大いに役立つ。

冊子体目録は、図書館の蔵書のうち、特定の主題に限ったり、ある時代を区切ってその部分だけを作ることでもできるし、資料の記載事項の内容も形式も、また冊子自体の形態も必要に応じて自由に変更することができる。カード目録は古くから伝わって来たものの累積で、新しいカードを次々とくり込んでゆくのであるから、記述内容、形式等を急激に大きく変更することはできず、カードを作る人の個性を活かすというようなことはあり得ず、極めて没个性的である。しかも過去に犯されたまちがいはいつまでも生きて受けつがれてゆく。

以上のようなカード目録の短所および冊子体目録の長所があらためて認識され、加えて印刷技術の進歩とあいまって、近頃では冊子目録が方々の図書館から出されるようになった。それらの中で最も大規模で劃期的な役割を果し、世界に広く普及しているのは、米国議会図書館の印刷目録である。<sup>9)</sup> この目録の出現によって、他図書館の館員も研究者も同図書館の資料内容を知ることができるようになり、図書館間貸出しに役立っていることができるようになった。またカタログは、図書の分類番号、件名、標目のとり方等を同目録によってしらべて目録作業のよりどころとし、作業の質を高め、標準化すること

に役立てた。また、図書館の目録として冊子体目録の可能性、有用性を実験して見事に成功し、その後多くの冊子体目録の出現に先鞭をつけた。目録の編集、冊子の大きさ、字の大きさ、紙質、印刷の方法等の見本を示す等、この目録の果した、また果しつつある役割は大きい。

ここで片手落ちにならないためにつけ加えておくべきことは、カード目録の長所と冊子目録の短所である。前者の最大の利点は up-to-dateness 即ち常に蔵書内容の最新の状態を反映することができることである。新しいカードをどの場所にでも自由に繰り込み、不用のカードを自由にぬきとり融通自在である。冊子目録は反対に最新の状態を反映することが困難であり、融通がきかず、変更ができない。編集して出版するのに一度に多額の費用を要し、出版後の変化については補遺を出さねばならぬ。長所即ち短所である場合もあり、持ちはこびが自由であるということは、複写のため他の場所に持ち去られたり、盗難に遭うというようなことが起りやすい。カード目録は1人が1引出しを使っても他の部分は別の人が自由に使えるが、冊子目録では1人が1冊使うと、目録の大きい部分または全部を1人で占領することになる。

以上カード目録と冊子目録について述べたが、その他の図書館目録の形態としては、両者の折衷ともいふべきルーブリック式、機械化によるパンチカード、ロールマイクロフィルム、カードまたはシートのマイクロテキスト、磁気テープまたはワイヤー等が可能である。<sup>7)</sup> このように色々な形態が考えられるとはいえ、日本の場合まだ一部の官庁とか国立大学とか民間の大企業のようにそのために巨額の予算の計上できるごく少数の機関でやっと研究に着手したという程度で、実用的に役に立つ段階には至っていない。これらが実用的に役に立つようになったとしても、どの形態の目録もそれぞれに長所、短所があり、図書館目録として要求される色々な機能を全部果す万能形というものは一つもない。したがってカード目録がいかにかさばり、費用がかかるからといって、現在のところ、全面的にこれを捨て去って、他の形態の目録に切り替えるということとはできない。どの形態の目録を併用するにしても、基礎となるのはカード目録である。したがってカタログは、やはり目録カードの作成、編成、カード目録の維持管理ができなければならないが、同時にカード目録の果し得ぬ要求にもこたえることも考えなければならない。上述のような各種の形態が図書館目録として可能であること、およびその特長、限界もわきまえなければならない。この点 Mann や Akers

がそれぞれの本を書いた頃はまだ今日のように、この方面に应用可能な技術が目ざましい発達をとげず、図書館活動の中にとり入れられることが考えられていない時代であるから、カード目録以外の形態についてはふれられていず、それらについては新しく出ている諸種の文献によって学ばなければならない。例えば、和書でごく新しいところでは、小平薫著、「資料整理のやり方——情報収集から資料の管理まで——」(日刊工業新聞社, 1965)、IBMで出したマニュアルの日本語訳で「図書館業務の機械化概説書」というようなものがある。洋書でも最近この分野の資料はおびただしくでているので枚挙にいとまがないが、初心者のためには、Allen Kent “Textbook on mechanized information retrieval” (New York, Interscience Publishers, 1962) が挿絵も豊富できわめてわかりやすくできている。

このように見て来ると、これらの図書館のカタログは、世間とは没交渉で部屋の片隅でカード書きをしている古めかしい人間ではあり得ず、非常に近代的な科学技術の進歩の尖端のレベルを理解する人でなければならないことがわかる。

### III. 図書館目録と索引, 抄録について

前節では目録の形態について考察したが、ここでは最近の図書館資料の傾向から目録を考察してみることにする。過去においては図書館資料としては単行書が主要部分を占めていたが、近年では図書は第一義的な重要性が薄くなり、雑誌やレポートやパンフレット等速報性の強いものに対する要求が多くなって来た。この傾向は科学技術部門で特に著しいが、社会科学、人文科学の分野でも同様の傾向が強くなって来ている。したがって資料整理においても、従来の図書中心から、雑誌その他の非図書資料のスピーディな整理に重点を移してゆかなければならない。またこれまでの図書館目録は雑誌記事の内容まで分析することはしていないので、雑誌のっている個々の論文を探し出すことはできない。しかし前にも述べた通り、カード目録はすでに尨大になり、複雑になりすぎているので、更に雑誌記事の一々を記載したカードを繰り込んでこれ以上カードをふやすことは、益々カード目録の機能を低下するし、そのような仕事をふやす人手も不足である。したがって現在の図書館のカード目録は、主題検索のためには資料内容の分析が大まかすぎて充分に役に立たず、一方では尨大になりすぎて使いにくいという矛盾をはらみ、中途半端な存在となりつつある。

多くの文献が単行本としてよりも雑誌の形で出版されることが多くなるにつれて、これら文献の所在を指示する何らかの索引がなければ、資料の洪水の中に没して再び日の目を見ることができず、活用されることもない。このことは、図書館界のみならず、諸方面で痛感され、各種の雑誌記事索引や抄録誌などいわゆる二次資料が出版されるようになって来た。それらは商業出版物でも研究機関等の出版物でもほとんど皆冊子体をとっているから、どここの図書館でも入手することができ、これらを図書館の目録と併用することによって図書館資料の中に含まれる細かい情報をも引き出すことができ、図書館目録の中途半端さを補なうことができるようになった。そのためにカタログは、それら書誌的ツールにはどのようなものがあるか、どれが自館に必要なかを知り、その各々の機能、限界を理解し自館の目録との関係を明確にして、無駄のない作業をしなければならない。索引とか抄録誌は、月刊とか隔月刊というように、一定期間を区切ってその間に出版された文献を収録して次々と出版してゆくので、それら自身定期刊行物の形態をとる。したがって途中で欠けたり紛失したりすることは全体の機能を著しく低下し、値打のないものとしてしまうので、絶対に避けねばならぬ。

資料処理の機械化、印刷技術の発達につれて、これらの出版物も益々大規模となり、数も多くなる傾向にあり、図書館の目録のあり方にも影響をおよぼすようになった。これまでの図書館の目録では、目録をとる対象となるものの単位は、1冊ごとの図書か雑誌が主であったが、雑誌記事索引では、索引されるものの単位は雑誌記事の中に含まれている情報である。したがって、図書館の目録においては、資料の著者、書名、出版事項、対象事項等それぞれを詳しく記述したが、索引においては、資料の含んでいる主題内容すなわち情報を問題としていて、情報の運载体は問題にしていけないので、運载体そのものの記述はせず、情報の所在をできるだけ簡単な形で表示するにすぎない。従来の図書館目録が記述に重点をおいたのに対して、索引類では主題に重点がおかれている。図書館目録に対しても、何某の書いた何々という本があるかないかという探し方のほかに、何々という主題についてどう資料があるか、例えば電子計算機のプログラミングについて色々な資料を知りたいというような探し方も多くなっている。分類とか件名というような主題目録に関する事項が重要になってきた。主題目録に重点をおくということと、図書館目録に要する費用をひ

きさげの必要とがあいまって、図書館目録においても記述の部分を簡素化する傾向が強くなり、図書の大きさや図版等の記入をやめたり、外国人著者名の姓以外の部分は頭文字のみでもよいとして、従来のようにフルネームをしらべるための時間と労力を節約し、筆名で書いている著者の本名をしらべる手間を省いて、著者が資料に記した通りの名前で記入することがルベッキー等によって提唱され、広く受け入れられるようになった。<sup>8)</sup>

また、主題目録に重点をおくようになった結果、図書館目録に使用されている件名標目表の再検討、雑誌記事索引に使われている用語との比較等が行なわれ、各学問、技術の専門分野でそれぞれの詳しい件名標目表を作ったり、分類体系を組み立てようとする試みも多くなった。

#### IV. 資料整理における協力、中央化の問題

上述のほか、図書館の目録、分類作業に影響をおよぼす事柄としては、資料整理の協力、中央化の問題がある。その一つのあらわれは、国立図書館や図書館協会やその他の大きい機関から図書の印刷カードが頒布されることがある。その最も発達普及しているのは米国で、米国の図書館で印刷カードを使っていない図書館を探すのはむずかしいくらいである。よく訓練され、経験をつんだカタローガーの不足に加えて、前にも述べた通り、整理部門の仕事は量的に増大しているのみならず、質的にもむずかしさを増している。商業と能率の国アメリカでは、個々の図書館でそれぞれ目録カードを作るより、議会図書館やウィルソン会社等で作られる印刷カードを購入する方がはるかに安上りであることはつとに計算済みで、人手の少ない小図書館は勿論、資料の増加の著しい大図書館でも殆んどの図書館で印刷カードを使っている。ニューヨークの H. W. Wilson 株式会社の印刷カードは、新刊の商業出版物のうち、学校図書館と公共図書館で購入される図書のみに限ってカードを作り、そのカードには図書館目録としての記述事項のほか、図書の内容を簡単に紹介してある。米国議会図書館の場合、自館で受入れる資料および著作権登録のため納本された資料のうち、同館の蔵書として受け入れられるもの全部について印刷カードを作るので、印刷カードの作られる資料の点数はウィルソン会社にくらべてずっと多く、1963年度の印刷カードの売上げ枚数は 46,022,622 枚に達している。<sup>9)</sup>

日本でも国立国会図書館で印刷カードが作られ、一般にも売出されているが、その普及は米国程めざましいも

のではない。1963年度の印刷カード作製、頒布状況は、作製した印刷カード 11,304 標目、1,038,106 枚であるが、これらを利用した図書館の数は、国立国会図書館の支部図書館 3、大学図書館 55、公共図書館 23、学校図書館 9、専門図書館 11、出版業者および個人 8 で、計 109 館である。<sup>10)</sup> 売捌かれたカード枚数はわからないが利用率は低いようである。米国では図書が出版されると同時に、または出版より早くカードができてしまう場合もあるくらいで、一般に非常に早くカードができるが、日本の場合出版されてからカードのできるまでの日数が多いのが、普及をはばむ最大の理由である。カード作りの能率を増進して早くでき上らせるためには、カードを作る図書館側の努力のみでは足りず、出版業者の協力が大切である。新刊書を作る場合、本のゲラ刷ができ次第図書館に届け、それで目録をとり印刷カードを作るようにすれば、出版社で校正、印刷、製本などをして本ができる頃には印刷カードもできあがり、その本を購入する多くの一般図書館では本とカードが同時に入手でき、まことに便利である。

以上のように国立図書館その他の大機関によって目録作業が行われ、印刷カードが作られて、それらを個々の図書館が利用するという目録作業の中央化には種々の利点がある。その主なものとしては、1. 個々の図書館で同じ資料の目録を何度もとるといふ仕事の重複が避けられる、2. 国内の目録作業要員を有効に使うことができる、3. 目録作業のコストをさげることができる、4. 仕事の重複が避けられるため、多数の標目を目録することができる、5. 目録作業を均一化し、質を高めることができる、6. 利用者としては、あちこちの図書館へ行っても、同じ方式の目録ができていれば使い易くて便利である、等をあげることができる。

このような全国的な規模の中央化と併行して、外国ではもっと小規模な中央化も進んでいる。例えば、多くの学部図書館をもつ大学図書館、いくつもの分館をもつ大公共図書館等では、それぞれの中央館で傘下の図書館の資料の整理を一手にひきうける。また館種が異っても地域的に近くにあるいくつかの図書館が協同の整理機関に整理をしてもらうという例もある。上に述べた中央化による利益はこのような小規模の中央化にもあてはまり、各メンバー図書館が整理作業をしないことによってういた図書館員の時間とエネルギーはサービスの向上に振りむけることができる。しかし物事万事いいことづくめということはあり得ず、整理をしてもらう図書館の側から

は資料が整理されて届いて来るまでの時間がかかりすぎるとか、特殊な専門書の分類や件名が適当でないことがあるというような不満の声もでる。目録作業の中央化が行なわれるためには、メンバー館がなるべく同質の図書館であること、同一の分類表を使い、同じ程度の記述の詳しさでよいとし、細部については妥協をすることが大切である。

米国の図書館協会が1959年にしらべたところによると23の整理業務センターがあったという。<sup>11)</sup>この23という数字には、大きな大学の中央館とか、分館をもつ大公共図書館というような同一組織内の中央化したものは含まず、各々独立した図書館のためのセンターをさすのである。そのようなセンターが1965年には50を越し、増加しつづけているが、これはそのような中央化が成功している証拠であろう。これらセンターの組織は色々で、あるものはメンバー図書館が協同出資してセンターを作り、またあるものは、州とかカウンティとかの行政区が一つのセンターを作り、州内の図書館、またはカウンティ内の図書館の整理を請負ってやっているところもある。米国の公共図書館基準には、専任の目録係をおくことのできるくらい大きい図書館でない限り、自館で整理業務をやるべきでないと規定し、<sup>12)</sup>同じく学校図書館基準には、1学区内に二つまたは三つ以上の学校がある場合は整理業務の中央化を考えるべきであると忠告している。<sup>13)</sup>センターで行う仕事は普通発注、目録、図書の装備までで、図書の選択は個々の図書館でやる。しかし、センターでしかるべき新刊書のリストを作り、メンバー図書館はその中から欲しい図書を注文するというように、センターが図書選択の手助けをもしているところもある。

日本では一つの大学の中でも、各部局図書館がめいめい別の分類表を使い、違った方式でカードを作っているのが普通で、一大学内の中央化もむずかしい状態である。したがって学内の全部の資料をとらえるための学内だけの小規模な総合目録さえも作りにくく、無駄と知りつつ多くの重複を続けている。貧乏しながら無駄を省くことのできない合理性の乏しさは、諸物価高騰の折ではあり、も早有さるべきではない。セクショナルリズムの壁を打ち破る革新的な若いジェネレーションの活躍が待たれる。

しかし、日本にも一部には進歩的な動きが見え、外国図書の輸入業者の中に、輸入する外国図書に、米国議会図書館の印刷カードをつけて図書館に納めようとの試みを研究しているところがあり、Card-with-booksの可能

性についての研究も行なわれた。<sup>14)</sup>図書館員はこれらの運動を助長、発展せしめて、整理業務簡素化のために役立てたいものである。

商業的な図書館サービスの面でも外国では相当に進んでおり、たとえば米国では1959年より、図書館用品の販売、図書の取次販売およびその図書の整理を合併した仕事を商売とする会社があらわれた。図書館で購入したい本を注文すると、本に必要な枚数の議会図書館の印刷カードをつけるのみならず、本に請求記号のラベルをはり、ブックカード、ブックポケット、貸出し期限票をつけ、更に公共図書館に対しては、本がいたまないようにビニールカバーをかけて、書棚にならべるばかりにして図書館に納めるサービスをする会社である。そのようなサービスに対して図書館側の支払う費用は、普通の本で約37セント(140円)で、会社側の宣伝によれば、個々の図書館で同じ仕事をするよりずっと安く、早く、均一な仕事ができるという。このような会社は現在アメリカには15社あるという。<sup>15)</sup>

このように見てくると、一方では整理業務の協力、中央化運動によって、目録の標準化、均一化が要求され推進されているが、他方では、学問、技術の細分化、特殊化につれて、それぞれの分野の資料、情報を合理的に整理するために、特殊な分類表、件名標目表を作って独自の整理を行なおうとする全く相反する二つの傾向があり、これらをいかに調整するかは、今後の図書館界に課せられた極めてむずかしい問題である。

## V. カタローガーの真の機能

これまでのカタローガー教育においては、もともと普通に図書館で受け入れられる図書の目録分類を中心に授業が行なわれて来たが、今後はこれら普通の図書について印刷カードを購入したり、国立国会図書館、日本図書館協会等の出版する目録等により、分類番号や件名を参考にすることができるのであまり問題は起らない。ところが近頃は外国語の資料とか、新しく開発された学問技術の分野の資料等取扱いのむずかしいものがふえ、それらを間違いなく処理できる人が要求されている。したがって整理部門では、ひと度方針や手順を定めれば、専門職でない事務職員で間にあう多くの仕事と、高度の知識を要する専門的なむずかしい仕事とにわかれ、中間的な未熟な専門職のする仕事はあまりなくなる傾向である。ところが現在の図書館学教育によって訓練されたカタローガーはまさにその未熟な専門職であって、現場の

要求に応えるべく中途半端である。カタローガーの教育は高度の能力をもった精鋭を作り出さなければならないが、それをどのように実現するかは非常にむずかしい問題である。現場である個々の図書館は、設立の事情、目的、規模、維持する費用の額と出所、図書館員の数、利用者の種類と数等がそれぞれ異なり多様である。それぞれの図書館の条件にあわせて行なわれる資料組織のし方もまたいろいろであるから、それらの異ったやり方、手順をいちいち教えこんで、すぐどこ現場に行っても役立つカタローガーを養成するというには到底不可能である。したがって学校における教育では、資料組織の理論と歴史を十分に習得せしめ、図書館学における一般教養ともいうべき基礎知識をもつことによって判断力、応用力を養う必要がある。図書館目録の形態としては辞書体のカード目録のみでなく、分類目録、カード目録以外の目録形態をも理解せしめ、索引や抄録の原理を学ばせ、代表的な一般書誌、各主題の書誌等についての知識をもたせねばならぬ。現場に配置された図書館員のためには、ワークショップや研修会等の機会を提供して、現場に個有な問題解決の道を開かなければならない。

更に専門職のカタローガー教育で大切なことは、仕事の価値判断、科学的経営の能力を得せしめることである。確立した目的に到達するために最も無駄のない効果的な仕事をしてゆくという心がまえを植えつけることである。図書館全体の維持管理には大きい費用を要するのであるが、そのうちの資料費は資産として残るものであるから、経営者にも納得されやすいが、整理業務にかかる費用はそうはいかない。これまでに図書整理に要する費用を科学的に算出しようとする試みが種々行なわれているが、図書の整理は複雑な作業の組み合わせであり、でき上った目録の質が均一でない等、算定しにくい要素が多く、決定的なコスト計算法はまだ出されていない。しかし、資料1点を整理するのに要する時間から割り出して、非常に高価につくことだけは明らかであり、また蔵書数がふえればふえる程資料1点の整理費も増してゆくことも明らかである。このような傾向が資料整理の協力的体制、中央化を真剣に考慮し発展させようとする努力の原動力となっているのである。いかなる変化に対しても保守的、消極的になりやすいカタローガーに対して、米国の図書館学教授 Paul S. Dunkin は“Creative scepticism”<sup>16)</sup>をもとといった。これは現在の仕事のやり方が果して最良の方法であらうか、今までやって来たからやるといふのではなく、目的にあった効果的な方法で

あるかという疑問をもち、客観的な評価をくだし、柔軟性をもつことを心がけよという程の意味であると思われる。この稿の最初に述べた通り、これまでのカタローガーは融通のきかない人種であると思われていることと思ひ合わせれば、もっともな忠言である。カタローガーの芳しからぬイメージを返上するために、我々は常に若々しい懐疑を持ち続けなければならない。

- 1) Butler, Pierce. “Bibliographical function of the library,” *Journal of cataloging and classification*, vol. 9, Mar. 1953. p. 3.
- 2) Shera, Jesse H. “On the teaching of cataloging,” *Journal of cataloging and classification*, vol. 12, Jul. 1956. p. 130.
- 3) Harvard University Library. *Annual report for the year 1955-56*. Cambridge, Mass., 1956. p. 6.
- 4) Rider, Fremont. Alternative for the present dictionary card catalog. <Randall, William M. ed. *The acquisition and cataloging of books*. Chicago, University of Chicago press, 1940> p. 140-2.
- 5) 国立国会図書館職員組合. 国立国会図書館のローマ字へボン化問題について. 東京, 同職員組合, 1964. p. 1.
- 6) U. S. Library of Congress. *A catalog of books represented by Library of Congress printed cards, issued to July 31, 1942*. Ann Arbor, Mich., Edward Bros., 1942-46. 167 v.
- 7) Weber, David C. The changing character of the catalog in America. <Strout, Ruth French. *Library catalogs; changing dimensions*. Chicago, University of Chicago Press, 1964> p. 32.
- 8) Osborn, Andrew. *Descriptive cataloging*. Preliminary ed. Pittsburgh, Pa., Graduate Library School, University of Pittsburgh. p. 49-54.
- 9) U. S. Library of Congress. *Annual report of the Librarian of Congress for the fiscal year ending June 30, 1963*. p. 111.
- 10) 国立国会図書館年報, 昭和38年度. p. 26.
- 11) Westby, Barbara. “Commercial cataloging services,” *Wilson library bulletin*, vol. 39, Mar. 1965, p. 560.
- 12) American Library Association. *Public library service; a guide to evaluation, with minimum standards*. Chicago, 1956. p. 55.



- 13) American Library Association. *Standards for school library programs*. Chicago, 1960. p. 112.
- 14) 丸山昭二郎. “Card-with-books の可能性について,” 図書館界, 16 卷, 1964. 11, p. 76-9.
- 15) Westby, *op. cit.*, p. 560.
- 16) Dunkin, Paul S. “Petty code and pedagogues,” *Journal of cataloging and classification*, vol. 7, Summer 1951, p. 53-57.